

## 《17》〈インタビュー〉 子育て支援に関するフィールドワークから

今日は横浜市立大学の三輪律江准教授のゼミ生の皆さんにお集まりいただきまし

た。三輪先生のゼミでは、未就学児を適切な環境の下で、健全に発達するようにフォー

ローするために、まちがどう関わっていくかという視点で、それを「まち保育」とい

う言葉で表して研究をされていますが、今日は、皆さんが保育園や子育て支援者の方々と

行っているフィールドワークのことや、子育てがしやすいまちについて、お話を伺い

できればと思っています。では、まず自己紹介をお願いします。

【里方】横浜市立大学4年の里方です。昨年、神奈川県で、防災とまち保育を

合わせたプロジェクトを行っています。プロジェクトは神奈川県と

奈川区との協働事業で、「まち保育」の観点から取り組む

保育・教育施設の共助構築に向けた検討・実践」というものですが、その中で、アンケート調査などを通して、保育者

の方々の地域や防災に対する意識や行動の変化について研究しているところです。

【遊佐】4年の遊佐です。私の研究テーマは、妊娠期の母親の「まち使い」についてで

す。地域子育て支援拠点に通っているお母さん方が、妊娠中にどこによく行っていた

かなどをアンケートで調べ、一人ひとりのサンプルを地図

に表して生活圏などを分析し、子育て不安について、どのようなタイプの人がどうい

う子育て不安に陥ってしまう傾向があるのかといったことなどを研究しています。

【井上】3年の井上です。私が今ゼミで関わっているのは、まち保育のプロジェクトで、神奈川県と青葉区のプロ

ジェクトに参加しています。神奈川県では保育園の園長先生を対象とした講座、青葉区

では「保育施設と地域をつなげる仕掛けづくりの実践プログラム」をテーマに地元保育園の運営法人と活動をして

いて、現在は「まち保育おさん

ぽピンゴ」の開発と実施に関わっているところです。

【大西】3年の大西です。私も神奈川県とまちづくり

に参加させていただいていま

す。また、青葉区ではプロジェクトのリーダー的なポジションとして、保育園の先生方と

様々な話し合いをしたりしています。自身の研究テーマはまだ決めかねていて

るところですが、育児不安の解消や、それとまちづくりがどう関わって

いくのかといったところに今は関心があります。

【須田】3年のゼミ長をしています。私は三輪先生のみならず、青葉区には、木

ラポ」という拠点で、主に子どもに関連したプロジェクトのサポートや企画として、

「あしたひろば」というものをやっています。月曜日の午前中に地域のママさんたちと一緒に運営に関わらせてもらっ

ています。個人の研究テーマとしては、子どもの遊びや、お母さん方がどうやって情報を

得ているのかということに興味があります。紙情報や口

コミ、ネットの情報というものをいつどういうタイミングで使ったら使いやすいのか、

逆に届きやすいのかということも調べたりしています。

【佐藤】3年の佐藤です。井上さんと大西さんと一緒に、神奈川県と青葉区のプロ

ジェクトに関わっています。最初は災害や防災のほうに興味があ

ってプロジェクトに参加していたのですが、参加を通して地域と保育園の関係性や、

子どもがまちをどのように見ているのかといったところに最近興味を持っています。

【フィールドワークを通して】自己紹介の中でも、面白そうなキーワードがいっぱい出てきたと思います。横浜市をフィールドに現場に行

って、保育園の先生や支援者をして、皆さんと一緒に何かをつくり上げていくとい



井上 舞  
横浜市立大学国際総合科学部国際都市学系 三輪ゼミ13年



遊佐 菜月  
横浜市立大学国際総合科学部国際都市学系 三輪ゼミ14年



里方 沙枝  
横浜市立大学国際総合科学部国際都市学系 三輪ゼミ4年

フィールドワークを行い、積極的に研究に取り組んでいるところが三輪ゼミのすごいところだと思いますが、フィールドワークでは、多くの方と出会ってきたと思います。保護者の方、保育士の方や、地域の方との出会いもあったと思いますが、活動を通して気づいたことや感じたことなどをお話いただけますか。

【里方】ゼミでのプロジェクトではありませんが、インターンで地域子育て支援拠点に2週間ほどお世話になったことがあります。そのときにスタッフの方から、子育てで困ったことがあっても、施設の前を行ったり来たりしていて、声をかけても「大丈夫です」と言っていたお母さんが、ようやく拠点に通うようになって、表情が明るくなったというお話を伺いました。子育てを手伝ってくれる人が近くにいない方も多いと思いますし、地域の方と子育てのこゝろや子育て以外の話も気軽にできる場所、安心できる場所があることが本当に必要なんだなと実感しました。

良くなることができ、お母さんがいなくても遊べるようになったということがあります。学生でも力になれることがあるんだと、そのときに思いました。

【須田】私も里方さん同様、地域子育て支援拠点にインターンに行ったのですが、ママ友がもうそこでできていることを知って、保育園に入る前にお友だちができるのはいいなと思いましたが、何か面白い話があるかなと思って、そのママ友さんたちの会話に入ってみたことがあったのですが、頑張ったつくった離乳食を子どもに「食べる？」って食べさせたら、「いらない！」って投げられちゃって、「私の30分の努力が！」という話をされていて。その話をすると家が中だと旦那さんしかいなかったりすると思いますが、その人にとつて、話せる相手がいるというのがまずうれしいうなというのがまずすごく感じました。話す相手がいらないのはストレスだと思えますし、そのような場があるのはいいなと思いました。それから、もう20年くらい来ている、子どもと遊ぶのがすごく上手なボランティアのおばあちゃんがいっちゃったのですが、スタッフの方が

様子を見ていて、その方の不調に気づくということがありました。人とのつながりの中で、そのような発見もあるんだなと思いました。地域子育て支援拠点は、「地域」が付いているので、保育園のように子どもたちとお母さん方の場所というだけではなくて、地域の人の関わりがあるという意味合いがあるんだと改めて思いました。

—— 子育て支援拠点ではなくて地域子育て支援拠点。これは国もそう言っているからですが、「地域」という視点はすごく大事だと思います。それから、先ほど里方さんも「学生でも力になれる」とお話をされていて、支援する側とされる側という分けとは何でしょうか。みんなが集ってお互いを支え合う。大事なお話だったと思います。他にはいかがですか。

【大西】私はフィールドワークやワークショップを通して、地図に情報をまとめるという作業の大切さを感じているところです。子どもが喜びそうなものや防災に役立ちそうなところなどを写真に撮って、手持ちの地図にメモして、戻って来て大きい地図にまとめ直すという作業をよくやっています。保育園や幼稚園

の先生たちが「いろんな発見とか気づきがあるね」と話してくれます。公園の中で落ちているものなど、普段は気づかないようなものに目が行くようにもなります。地図にまとめてみると見てよく分かりますし、ワークショップに参加してなかつた人たちにも伝わるように思います。

【遊佐】私もフィールドワークで実際に歩いてみて、気づいたことをしっかりと地図に表すことは大事なことで感じています。大人の視点と子どもの視点では違った気づきがありますし、地域の人に見てもらおうことで、子どもの視点や子どものこともよく知ってもらえる機会になるように思います。フィールドワークはまちづくりに欠かせないと思っていますが、地域を知ること、よりその地域への愛着が湧くという気がします。

—— 地図での見える化が大勢というお話がありました。他にはどうでしょうか。

【佐藤】例えば保育園のまち歩きでは、事前の準備なども含めて、その園と地域のつながりが深まるように思います。まちにいる人たちと子どもや保育士の方が関わって、つながりがまた生まれていくように感じています。



大西 銀次郎  
横浜市立大学国際総合科学部国際都市学系 三輪ゼミ13年



須田 采李  
横浜市立大学国際総合科学部国際都市学系 三輪ゼミ13年



佐藤 真優  
横浜市立大学国際総合科学部国際都市学系 三輪ゼミ13年

聞き手  
こども青少年局子育て支援課

【井上】地域の中で、施設同士のつながりも大切だと思います。神奈川県区の研修会のときに、保育園の先生方が「お散歩のときにこういうことがあったら、ここで助けてくれるかもね」といった情報共有をしていて、他の保育園の先生方とするからこそ情報共有やつながりの大切さを感じました。

### ■フィールドワークにおける工夫など

次に、フィールドワークにおいて工夫していることや、気をつけていることなどを教えていただけますか。

【遊佐】まち歩き企画に主催者側として参加したときに思ったのですが、大学生は4年で卒業ということもありますので、地域の方たちだけで運営していくことも見据えて考えることも必要かなと思います。そのために、第三者、地域の外の人の視点ではなくて、しっかりと地域に入り込んで、その地域に住む当事者としての視点をベースに、地域の方々の知識をよく学び、自分の中に擦り込むということが大事だと思います。

【須田】私はプロジェクトやインターンで、お母さん方と



関わる機会が多いのですが、最近気をつけていることが二つあります。一つは、企画についてどういう伝え方をするかということ。新型コロナウイルスの影響で活動にも制約があり、「SNSを始めてみよう」と並木ラボの学生運営のSNSを始め、あしたひろばという子育て関係の発信を毎週月曜日に行っているのですが、地域のお母さん方が実はそのSNSをそれほど使っていないということがありました。せっかくなので頑張っ

え方には結構気をつけています。

二つ目は、先ほどもお話がありました。支援する側とされる側という関係になりがちということ。インターンのとき、お母さんがトイレに楽に行けるように子どもの面倒を見てあげようと、最初は支援する側の気持ちでいたのですが、そうではなくて、子どもたちと遊んだり、お母さん方と話をしたりしているうちに、私が子どもと遊びたいから遊んでいる、自分の研究のためということではないかと思ってしまうようになりました。助けようみたいな気持ちで取り組むのは、なんかちょっと違うかなという気持ちが生まれてきました。

—— 学生に限らず、単純にその場が魅力的である、インセンティブがあるということ、人の集う場をつくる時にすごく大事ですよね。他にはいかがでしょうか。

【大西】フィールドワークの手法の検討ということになります。新型コロナウイルスの影響で今までどおりのフィールドワークができなくなって、他のメンバーと一緒に「何か新しいやり方を考えよう」と、今考えてるのが「まち保育おさんぽビンゴ」です(写真)。



子どもたちや親御さん、保育園にビンゴカードを配るのですが、ビンゴカードの中身は、まちの中に

ある子どもが喜びそうなもの、ただの木の枝や都道府県の形に見える石、普段散歩している声をかけてくれるおじさんなど、そういったものをビンゴカードの中に入れて、まちをゲーム感覚で歩きながら見つけていくというもの。をまだお試しの段階ですが作っています。

—— 使い方を説明して、皆さん、大体それとおりに使ってみてくれますか？

【大西】最初から「そのままいきましよう」とはならないですね。ビンゴというゲーム形式ですので、「子どもが喜んでくれそうだ」といった反応は結構多いのですが、実際に使ってくれる人と話し合います。今はビンゴカードのマス全部埋めないでわざと空欄をつくり、その空欄には地域のちょっと面白いものを

想像して中に入れてみてくださいというふうにしようかと考えています。

【佐藤】青葉区の「おさんぽビンゴ」の作成に関わっていますが、確かに私たちだけでやるというよりは、実際に使う方たちに「委ねる」ということも大切だと感じています。私たち学生が全てやっってしまうと、今後学生が関われなくなつたときに、自走していくことが大変になると思います。実際に使う人たちの意見を取り入れながら、その人たちが主体的に実施してみるほうが、今後長く続いていくように思います。

【井上】私も「おさんぽビンゴ」に関わっていますが、園の方からご意見やアイデアをいただき、マスに入れるものはそれを反映するなど、双方のやりとり、協力がし合える関係がないとなかなか実施は難しいということも感じていました。それから、メールよりも、顔を合わせて話すことがやっぱり大事なんだというのを感じているところです。

### ■子育てがしやすいまちとは？

—— 横浜市は安心して子どもを産んで、育てられる環境づくりということをすごく大

